札幌学院大学の源流を形づくった人たち

-Our Roots-

戦争の影響が色濃く残る 1945 年秋、創成河畔の消防本部の一室に 30 名～50 名の若者たちが集まった。
青春を国家と戦争に捧げた彼・彼女らは平和国家として生まれ変わる新生日本の国づくりに参画すべく、
英語の勉強会を始めた（消防本部を借りたのは、教師の一人が消防団にかかわっていたため）。

そして「長い間抑圧されていた『知的なるもの』への渇望が、学生たちの勉学意欲をかきたて」
（『札幌学院大学 50 年史』p.29）
やがて「札幌に文系の高等教育機関をつくろう」という大きなうねりとなって
札幌文科専門学院（1946-1950、通称「文専」）が設立された。
校舎は自前のものではなく、中島公園内の建物を札幌市から借りてのスタートだった。

掲げられた建学の精神は「学の自由」「独創的研鑽」「個性の尊重」。
これらはいずれも戦時中は全否定されていた価値観であった。
それを高々と掲げることができる自由な時代の到来を、文専に集う人々は実感した。

文専設立の中心にいたのは実業家でも教育者でも宣教師でもない、学問に飢えた一般の若者たちだった。
学校設立の申請者に名を連ねた教職員の一人は後にこう述懐している。
「学校づくりの真の原動力は自分たちではなく、若い世代の新しい時代に羽ばたこうとする情熱であり、
自分たちは彼らの情熱にほだされてつくらされた」。
ほだされる：「情にひかされて自分の考えにない行動をとる」（『大辞林』）

若者たちの志の実現をサポートする教職員の想いはこのとき以来、文専が札幌短期大学（1950-1978）、
札幌商科大学（1968-1984）、札幌学院大学（1984-）と発展を続ける中、
歴代の教職員に受け継がれてきた、いわば本学の DNA である。

札幌学院大学の源流は 76 年前、皆さんの先輩たちが形づくりました。
彼・彼女らが見つけた Answer は「自分たちの学びの場（学校）をつくる」。
皆さんは札幌学院大学でどんな Answer を見つけますか。
私たち教職員は全力でそれをサポートします！

2022 年 4 月 1 日　入学生歓迎企画にて

学校法人札幌学院大学
常務理事　白石英才